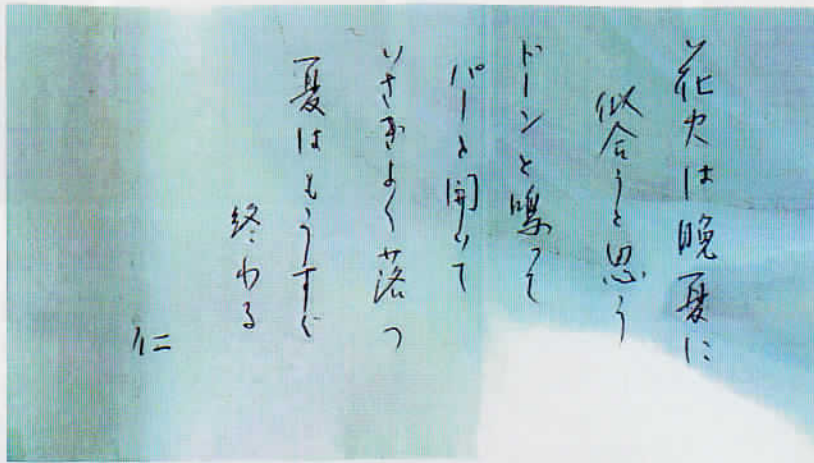




里山の風景をつくる会





## もくじ

表紙 絵・題字	山本 仁恵	1
もくじ 表紙の言の葉	山本 仁恵	2
こちよい風景 6 — 石見銀山・大森地区 —	河野 真理	3
特集：里山15年展		4-11
里山の風景をつくる会15年展	近藤 こよ美	4
15年間の主な活動 吉野川流送	八木 正江 他理事一同	5-7
来場者のメッセージ 森とまちをむすぶネットワーク	津嘉山 郁子	8
15年によせて	渡辺 荘司	9
里山15年展に参加して	田岡 三代	10-11
田んぼ探検隊 2015	近藤 こよ美	12-13
里山の家 竣工 — 小松島の家 —	野口 政司・路万	14-15
木の家をつくりつづけるために	小松 秀行	16-17
オリンピックってそんなに大事なの？	野口 政司	18
活動報告・行事予定・入会のご案内	近藤 こよ美	19
紅葉山だより	石原 禮子	20
あとがき	永田 公子	20

(カット) 佐々木 めぐみ



清水谷製錬所跡

なぜか黄金より、銀（しろがね）、そして「燻し銀」という語に心ひかれる。

2007年7月「石見銀山遺跡とその文化的景観」が世界遺産に登録された。石見の国は私にとってはまだ未踏の地であり、行ってみたい所であった。

16世紀前半、博多の商人神屋寿禎（かみやじゅてい）が海上から、石見の国の仙の山からたちのぼる「銀の気（き）」を見て、銀山の採掘を始めたという。（本当は地勢や岩石を熟知していたのだろう）寿禎はその数年後には、先進国朝鮮半島から唐人宗丹（そうたん）と慶寿（けいじゅ）という技術者を連れて来て「灰吹法」（はいふきほう）と呼ばれる新たな精錬法を伝える。これによって産出量は増大されたのだった。

折しも大航海時代で当時のヨーロッパの『オルテリウス／ティセラ日本図』なるものに、ラテン語で「石見」「銀鉦山」との記載がある。高品位の石見銀は、その全盛期（16C後半～17C前半）には世界の銀の三分の一（1/3）を占めたといわれる。

戦国の時代には中国地方の雄、尼子経久（あまこつねひさ）と毛利元就によって銀山の攻防が繰り返されたが、江戸時代には当然、幕府直轄領となる。

重伝建保存地区である大森の町並は深い緑に囲まれた銀山川沿いの鉦山町であった。銀山御料150余村の中心地として代官所の周辺に武家屋敷・商家が混在する特徴を持つという。旧河島家住宅は代官所に務める地役人の武家の住宅。熊谷家住宅は大森の町年寄を務める最も有力な商家である。欄間・柱・建具には日本家屋の品位がある。鉦山業・酒造業をはじめ代官所へ所用で周辺から来る村人を宿泊させる郷宿（ごうしゅく）でもあった。

鉦山地区には間歩（まぶ）と呼ばれる坑道・採掘遺跡が岩盤の中に口を開けていたり、清水谷製錬所跡の石積みが周囲の山にとり込まれて万緑の中に埋もれそうな風景は廃墟である。人の生活が自然と共にあった時間のなごりだから、見る者の心を穏やかにするのだろうか。

大森の町並に夕暮れ迫るころまで過ごしたのだった。

石見まで銀（しろがね）の気に導かる 青葉に残る過去の賑わい （真理）

## 里山の風景をつくる会 15 年展

NPO 法人 里山の風景をつくる会 代表理事

近藤 こよ美

5 月 15 ～ 17 日、新緑あふれる文化の森で『里山の風景をつくる会 15 年展』を開きました。私たちが 15 年間走りながら目指したことをどこまで表現できるのか、企画段階から検討を重ねました。15 年間の間に撮りためた大切なシーンを中心とし、それに伝えたい言葉を添えるという、近代美術館ギャラリーにふさわしい展示としました。ギャラリートークも 4 回催し、3 日間で 400 人近い入場者がありました。

15 年前、会の設立に関わったのは主に生協の組合員有志でした。それまでの組合員活動の殻を破って吉野川可動堰の是非を問う住民投票にむけた市民運動に参加し、そこで初めて吉野川上流の森の荒廃を知りました。そしてそのことに気づかせてくれたのが、今は亡き林業家 田岡秀昭さんでした。吉野川源流の森の木で家をつくることで吉野川の上流と下流をつなぐモデルとなろう。流域全体で森や川や海を守っていこう。気づきと出会いを経て NPO 里山の風景をつくる会が誕生。以後、四国・関西に 70 軒の里山の家を建ちあげてきました。

しかし林業の苦しい状況はいっこうに改善されません。1980 年当時 39600 円 / m<sup>3</sup> だった杉丸太の価格は 2010 年に 11800 円 / m<sup>3</sup>。55 年前の 11300 円 / m<sup>3</sup> に逆もどりしてしまいました。これでは山は潤うことができません。田岡さんがよく口にした言葉です。『山で暮らせる仕組みがなければ、だれが森を守るのでしょうか』。私たちはモデルとなる仕組みづくりをめざしました。木をしっかりと使い木の価値を生かした家をまちに一軒一軒つくっていくこと、そして木を育てた時間と労力に見合うお金を山に還すこと。このことは今までも、これからも変わらぬ私たちのミッションです。

来場された人たちから、里山の家や田園風景の写真を鑑賞して「昔住んだ田舎の家や田んぼのあぜ道での思い出が浮かんで来てとても懐かしく感じました」という感想をいただきました。またある友人はこう言ってくれました。「里山の風景をつくる活動があって里山の家がある。そこには筋が一本通っていて、15 年ぶれずに家づくりに取り組んで来たことがよくわかりました」。人が自然に働きかけて文化を生み歴史を積み上げ、そうして里山の風景がつくられてきたことを、15 年展から感じてくださったなら、その風土性を想いながら歩んだ 15 年の活動はきっとあらたな扉へと進んでいくことができるような予感がしています。

## 15年間の主な活動(1) 八木 正江 他理事一同



### ラブレター to 吉野川

2000年1月23日、「吉野川に可動堰はいらない!」「吉野川の未来に一票を!!」万感のその思いは投票率50%の厳しい壁を越え、徳島市民102759筆の意志に結実しました。

10年の歳月を経て、その意志は「10年目の123」に引き継がれ、同年3月、国はついに「可動堰計画中止」を決定しました。

翌「11年目の123」には“広がれつながれ吉野川!”を標榜、「吉野川YEAR」と名付けました。

“ラブレター to 吉野川”の合言葉は、川下と川上をつなぐ『流域圏構想』を作りつつ未来への夢を育てています。

### 森は海の恋人

おいしい牡蠣を育てるためには上流の森が大切であると気づいた漁師たちが、森に木を植え始めます。気仙沼の畠山重篤さんたちの奏でる森と海の物語は、私たち里山の風景をつくる会の活動の原点でもあります。

森と海と溶け合うという汽水域  
朝霧のようならむ水の濃度は

風花や小鳥や雲や風たちや  
佇ち尽くす樹を見舞うものたち

森は海を海は森を恋いながら  
悠久よりの愛紡ぎゆく

森は此方に海は彼方に生きている  
天の配剤とひそかに呼ばむ



熊谷 龍子

### 流域シンポジウム

森と川と海とがつくりだしている広い空間を私たちは流域という名で呼んでいます。この広がりの中に未来が詰まっている。流域でつながりを求めよう。川上と川下、森とまちにすむ人たちが集い、知恵を出し合っ  
て流域が豊かになっていく方法を考える最初の一歩が、流域シンポジウムでした。吉野川流域の最初のし  
ずくは瓶が森に生まれます。やがて大河となり、海へ。ひとりひとりがしずくと  
なり、流域シンポジウムは市民の大きなうねりとなり広がっていきました。



### 市民アクション 徳島

進む地球温暖化に危機感をおぼえるようになった私たちは、アル・ゴアの記録映画「不都合な真実」を上映するため「地球温暖化を考える市民アクション 2008 徳島」を、様々な分野の28団体と協力して立ち上げました。諦めてはいけない!地球上の一人一人が主体とな  
って、何をなすべきかを考え行動する!その必要性を認識し、学習、啓発、アクション  
と多くのイベントを開催してきました。

2011年3月11日以来、日本は放射能汚染という新たな問題を抱えることになり、それによりいくつもの活動団体が生まれ、熱心な活動が続けられています。

### 東日本大震災チャリティーコンサート

ウルマーカンマーソリスト in 芦屋・徳島

ドイツ、ウルム市を拠点に、世界中で演奏活動をしているウルム市管弦楽団の磯村さんご  
夫妻とヴァイオリニストのユリウ・ベルトックさんたちは、東日本大震災直後の2011年4  
月と翌年の3月にウルム大聖堂などでチャリティーコンサート『日本に祈る』を開催しました。  
日本でも2012年3月と4月にそれぞれ芦屋と徳島で復興支援コンサートを開き、収益金と  
来場者のカンパを「NPO法人 海は森の恋人」に贈りました。

2002年から6度の徳島公演を重ね、ベルトックさんのヴァイオリン独奏曲『ヒロシマ』、  
そして故郷ルーマニアを想う幻の曲『望郷のパラーデ』に心を打たれた人も多いのではな  
いでしょうか。

## 四国の森づくりシンポジウム

「四国の森は一つ」の合言葉で2004年に始まった四国の森づくりシンポジウム。4県の行政、民間、そして四国森林管理局連携での取り組みは当時非常に珍しい形で、そのため開催までの道のりは予想以上に大変でした。森づくりに取り組むNPOなどの団体が県を超え四国の森づくりネットワークを結成したことは森の再生に大きく貢献しました。徳島が開催県となった第2回、6回の際、当NPOが事務局となって企画・運営に携わりました。

## 里山シンポジウム

森や川や海に恵まれた私たちが、自然と共生しながら当たり前の暮らしをしていく術は何でしょう。町づくりや環境への取り組みをされている方を招いてお話を聴きました。

オークヴィレッジの稲本正さんは言いました「木を使い森の文化を受け継いでください」。「どんな森や流域をつくりたいのか、流域全体で考えることが大切」と話されたのは、中嶋信徳島大学名誉教授。そして林業家で里山の風景をつくる会理事の田岡秀昭さんは聞きました。「山で暮らしていける仕組みがなければ、誰が森を守るのでしょうか」。4月に亡くなられた中越武義さんは、自然エネルギーによる梶原の町づくりについて生涯語り続けられました。「わがまちは・・・」中越さんお得意のフレーズが蘇ってきます。

## 美しい風景をつくる

司馬遼太郎氏に、「即席ラーメンの袋のような」と表現され、そのうすっぺらで軽薄な風景が批判された現代の日本の町。そんな日本の町の風景をどうにかしたい、との切実な思いから、様々な事例に学び、美しい風景をつくるための取り組みをしました。



## 住まい方セミナー

たとえば、日本の文化の一翼を担う茶の湯には畳は不可欠です。四畳半（小間・広間の境）という矩形の一室では互いに身を狭くし、他者の行動に気使いをします。その気使い・思いやりを学ぶ場が茶室であり茶の湯なのです。住まい方セミナーでは、日本の古典を読み、百人一首で遊び、桜吹雪の中で茶を喫しました。木の風合いの中で・・・。「まちに森をつくる」という「里山の風景をつくる会」の理念は、「住まいに風が通る家」づくり、正に「庭屋一如」。日本の伝統の暮らしと文化の調和を学ぶセミナーです。

## 里山の家見学会

吉野川源流、嶺北の森の木をつかった「里山の家」では、建主さんのご協力をいただき、上棟時と竣工時に見学会を開いています。これまでに延べ6000人を超える参加者がありました。

アトピー、ぜんそくなどが、子どもだけでなく大人にも発症することが多くなってきています。また新建材やワックス、接着剤などに含まれる防腐剤や揮発性の物質で、さらに白アリ駆除剤など毒性の強い薬剤によって化学物質過敏症になったりする事例も増えてきています。せっかく建てた新居が原因で病気になったのでは本当にたまりません。このような状況の中で、無垢の木と荒壁・しっくいなどの自然素材を用い、健康と環境に配慮した「里山の家」の重要性がますます高まってきています。



## 吉野川源流の森ツアー

年に一度、私たちは、まちから森へ出かけて行きました。吉野川源流の森に入り、その実態を目にし、山の経済の厳しさを知りました。また、木の特質や伐り出された木が家になるまでの過程をひとつひとつ学び、木の家に住むことの大切さを実感しました。山の人たちとのあたたかいふれあい、満天の星、黄金色した棚田。そして、陽に映える紅葉、谷川のせせらぎ。美しい自然の中で子どもたちの目は輝きを増し、大人たちは童心に返りました。





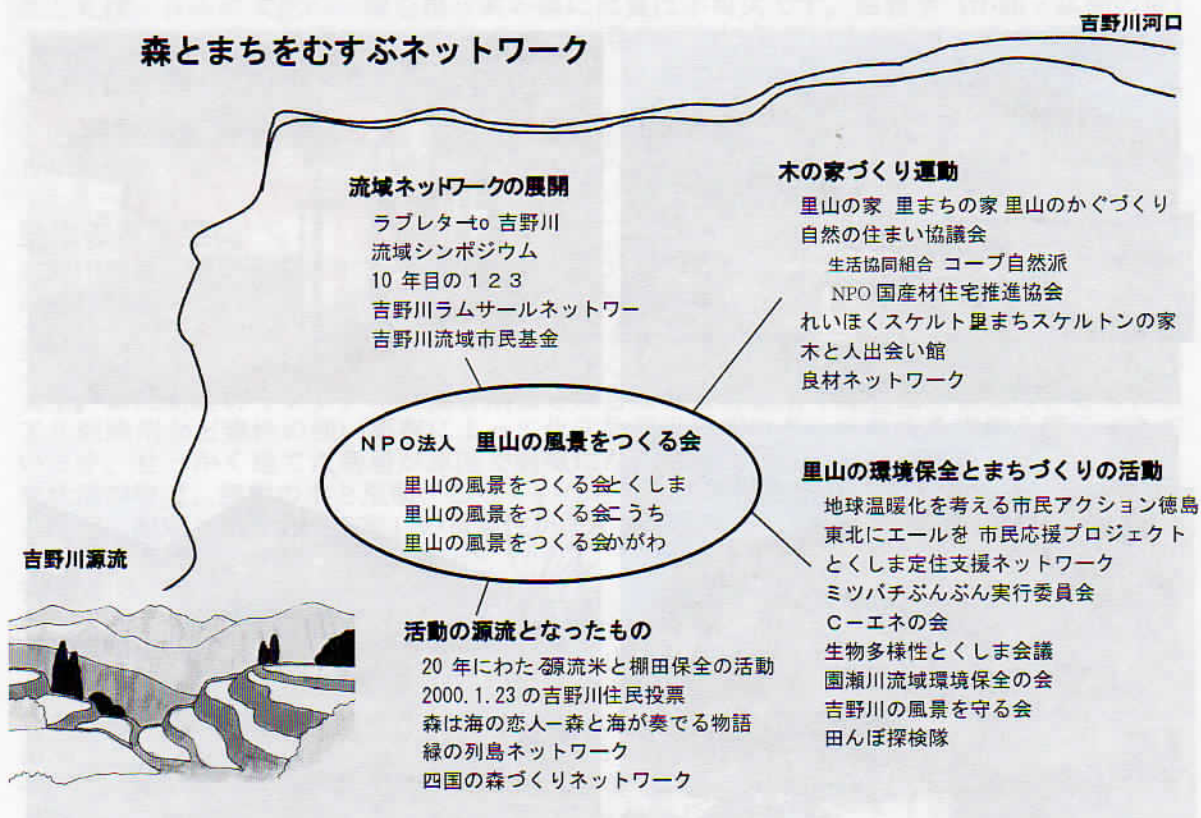
## 来場者のメッセージ

・里山の会がどのような活動をしているのかがよくわかりました。こどもが小さい時に知りたかったです。田んぼで泥んこになって、虫やカエルに触れ合う機会を今の子どもたちにもっと広く知らせてあげられたらと思いました。自然の木をふんだんに使った家は気持ちよいでしょうね。あの床に寝そべてみたい。やっぱり昔に戻るのが人間の自然な生き方なんだな～と感じました。次世代のために自然を守りたい気持ちは同じです。(無記名)

・木の家は温かみがあり、見れば見るほど良いなと思いました。田んぼや山で泥や木と触れ合う子どもたちの顔がとても生き活きとしていて、すばらしいと思いました。子どもがもう少し大きくなったら家族で参加してみたいです。(無記名)

・吉野川住民投票の頃の私たち・・確かにこの15年で様変わりしたのは街も自分も・・。沢山の建築を見させていただき、これからの自分たちの10年後を思い、老人シェアハウスの話で盛り上がりましたね。家族に明け暮れた15年の中で、これからはまた少し世の中の助け合い、支え合いを考えていきたいことと、自分の身の置き方も考えてしまいます。本当に。これからも友や地域の中で安心して暮らすことができますように、皆様方の今後のご活躍もお祈り申します。(HSさん)

・みなさまの里山、森、山、そこに住んでいる生きもの等、自然を思う気持ちが120%体感できる会場です。一NPOとしてこのような企画イベントは他で例がありません。ご立派な取り組みに脱帽です。これからも尚一層、活動の輪が広がるよう願っています。この会場にいますと、不思議に心静かにおだやかになれる時間となりました。ありがとうございました。(ZSさん)







これまで、「里山の風景をつくる会」の様々な企画に参加して、たくさんの人に出会い、いろいろなお話を伺ってきました。その中で特に印象に残っていることを二つ挙げます。

一つは吉野川源流の森ツアーでご案内いただいた、苗木を植えてから12~15年、人間でいえば中学生にあたる森の様子です。びっしりと植えられた木々の間に広がっていたうす暗がりに、どこか懐かしい感覚を味わいました。理由が解らないまま山道を歩いている時、「これから木ごとの個性を見極め、間伐してそれぞれに合った場所で使っていきます」という話を聞いて不思議な気持ちの訳を知りました。その暗がりは、背が伸び知恵もつく一方、将来への不安から周囲に苛々をぶつけていた中学生の私が抱えていた闇と同じでした。動物と植物、見た目は全然違う生き物が、同じ時期に共通する影をもつことを教えてもらい、あの不安だった日々を「どこにでも・誰にでもあるものなんだ」と受け入れることができたのは私にとって素敵なことでした。

もう一つは伐採の現場で聞いた「残った切り株は次の苗木のために表土を保ち、体を通して土の中へ水を届け、やがて分解されて大きくなった苗木と入れ替わる」というお話です。子どもへの接し方と子離れのタイミングという点について強い感銘を受けました。

「里山の風景をつくる会」とおなじ2001年に生まれた次女は中学2年になりました。難しい年頃にもかかわらず、離れて暮らす私に機会をみつけては身の回りの出来事に加え、将来の選択について具体的な目標を聞かせてくれます。35年前の私と同様、五人姉兄弟の真ん中で頑張る彼女の中にもボンヤリとした暗がりが広がっていることでしょう。でもその不安は、いきもの間に種と世代を超えて共通していること、向き合い・乗り越え・受け入れられるものだというのを父親として伝えていきます。

これから私は、子ども達が社会での役割を果たすために伐り出されていくその日まで、彼女らの傍らで根を張り支えます。この身を通して知識と経験と遊びを届けます。そしていつか祝福とともにその場を譲ります。「里山の風景をつくる会」に出会い、参加できて本当にラッキーでした。これからもどうぞよろしくお願い致します。

## 「まちと森をつなぐー里山の風景をつくる会 15年展」に参加して

吉野川源流の森 嶺北より 田岡三代

5月16日、私は息子と共に4年半ぶりに徳島道を会場に向かいました。

里山の風景をつくる会の15年展で息子、大史がギャラリートークをさせていただけるというありがたいお話を戴いたからです。

私にとっての4年半ぶりの徳島道はいたる所に、主人秀昭と共にあった思い出が蘇り、懐かしさでいっぱいになりました。

そして、文化の森総合公園内の近代美術館ギャラリーの会場は、まさに里山の風景をつくる会が今までコツコツと着実に積み上げてきた理念を共有する感動的な場でした。

息子のトークは、「父、田岡秀昭のめざしたこと」という題目でした。

しかし、秀昭にとって家はくつろぐ場であり、苦しさも持ちこまない代わり、子どもたちに自分の夢や想いを語ることは多くありませんでしたので、息子は秀昭の残したものの中から、何日もかけ、とりまとめ、秀昭の歩んでいった足跡を学んだようでした。

そして、息子の口から出てきた言葉は秀昭の言葉そのものでした。

4年たっても少しも色あせていない、ある意味、新鮮にさえ感じられました。

志半ばで突然、秀昭がいなくなって、4年。

たくさんの方々にご迷惑もおかけしましたのに、今またこうして秀昭の想いをクローズアップしていただき本当に感謝に堪えません。

里山の方々からは“森の伝道者”というありがたいお言葉を頂戴した秀昭は一貫して山の危機を訴え続けました。

森林の営みは50年、100年という長いスパンで営まれています。その中での4年間は、ほんの少しの休憩タイムのようです。

今いちど、秀昭の遺した言葉を皆様に聞いていただけたら幸いと存じます。



展示会場の様子



## 地産地消

今日本で出来るものの割合 自給率が問題になっています。  
食料はカロリーベースで約40% 穀物ベースでは28%と言われています。  
命の源の食料でさえこの状態です。何か国際的な紛争が起きれば  
日本人はたちまち飢えてしまいます。家畜の飼料にしる 石油にしる  
生活必需品全てが単に安いというだけで輸入に依存してしまっています。  
更に驚くべきは それだけ輸入しているのに食料の3割を捨てている事です。

木材も似たようなもので 80%を輸入して家をつくり わずか30年足らずで  
壊している。森のサイクルにはとても合わない使い方をしてしまっています。

地球環境 資源を考えれば近くでとれたものを使う というのは大変  
意味のあることであり 日本はそのシステムにならなければやっていけない時代が  
来たと言うことだと思います。

改めて本物の家づくりが大切だと感じます。

木に学び  
木の心で  
木配りを

2008年7月25日 田岡秀昭

今、私の住んでいる四国のおへそと言われる早明浦ダムのある土佐町の人口は、4月1  
日現在 4103 人です。このまま、過疎化が進んでいくと 2040 年には 2669 人になると言わ  
れています。

そしてまた、ある調査によると、土佐町の平均年齢は 62 歳だということです。

山が甦るのには一刻の猶予もないかもしれません。

山で暮らしていけるシステム、経済が回っていくシステムを作り上げなければ、山は荒廃を  
たどることでしょう。

その一助になればと、秀昭は必死に頑張っていました。

しかし、力尽きた今、木材自給率は若干ではありますが、伸びてきていると聞きました。

里山の運動はもちろんの事、もしかしたら秀昭の活動も大きな海の一滴の波紋になってい  
たのかもしれないなど嬉しくなります。

木に感謝し 先人に感謝し お客さまに感謝です  
木を大切に 長く使う  
そして後の世代に大切な森を残す  
木を使うことで 森が守られるのです

秀昭がよく言っていた言葉が、またまた蘇ってきます。

5月からスタートした田んぼ探検隊2015は、今年度6回シリーズで進行中です。このたび、全労済より地域貢献助成事業として30万円の助成金をいただきました。田んぼと生きもの、森や川や海、人の暮らしとのつながりに気づくことによって田んぼの価値を理解し、その価値を人に伝えていく人材を育てることを目指して、有効に助成金を活用していきたいと思います。



「田んぼをつくろう！」

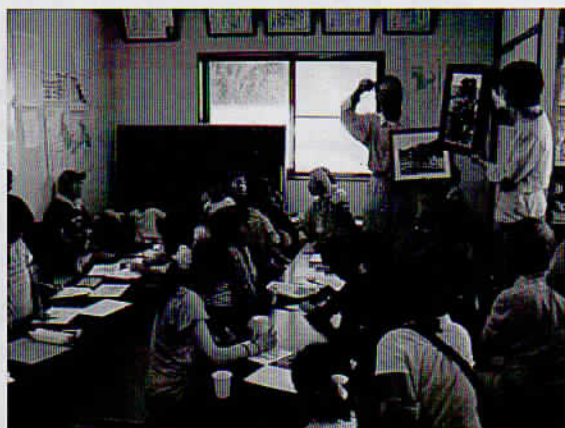
5月2日(土) 午前9時～正午 武蔵さんの圃場(小松島市大林町) 55名参加

8畝の田んぼに挑戦しました。最後までがんばって稲を植えていった子どもたちも、とろとろの泥の感触を気持ちよさそうに楽しんだ小さな子たちも、汗を流した後のおにぎりは格別でした。昨年は武蔵さんの田んぼも台風の被害に会い大変でしたが、今年はどうぞ順調に稲が育ちますように。



### 「赤腹イモリの生きもの探検」

5月30日(土) 午前9時～正午 北野さんの圃場 (小松島市田浦町) 64名  
産卵のために里山から田んぼにおりてきた赤腹イモリやナマズの稚魚、ホウネンエビ、カブトエビ、カイエビ、ヤゴなどを観察しました。北野さんの川と農と風景の80年を遡りながらのお話を聞き、自然を理解する人々の農の営みと暮らしがあって、この里山の風景は守られていることを改めて感じました。



### 「稲と一緒に育つ生きものの観察」

7月4日(土) 午前9時～正午 武蔵さんの圃場 54名  
田植えから2か月、苗は20本位に分化し幼い稲穂が茎の中でふくらんでいました。卵から孵った5mmほどのマメゲンゴロウやヒラマキミズマイマイなどの水生動物を顕微鏡で拡大して、精巧で個性的な姿にびっくりしました。夏の日差しの中、稲とともに生きものもどんどん成長していきます。



※これからの予定

(参加申し込み 近藤 090-7142-0910 まで)

### 「ナマズの生きもの探検」

8月1日(土) 午前9時～正午 暮れ越しの溜池下 (小松島市榎淵町)

### 「稲刈りしよう！」

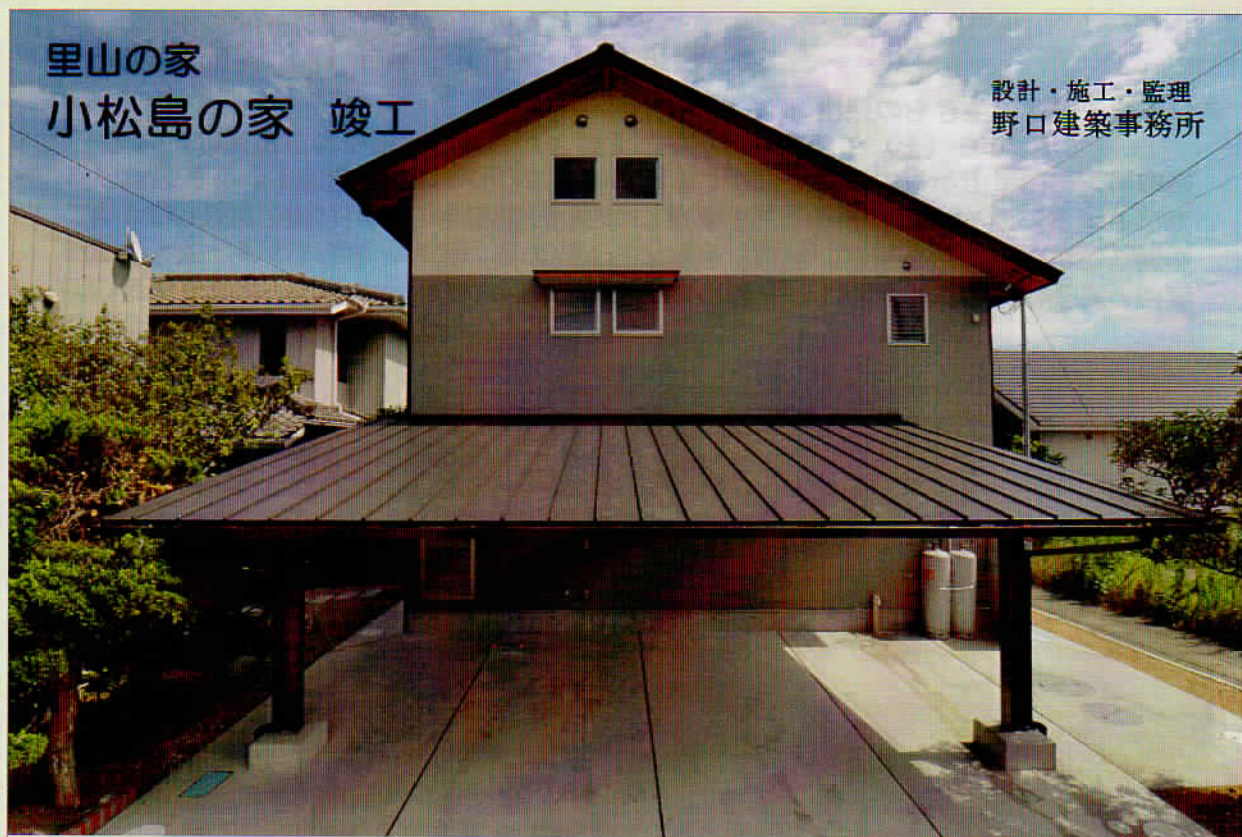
8月29日(土) 午前9時～正午 武蔵さんの圃場

### 「収穫祭」

10月3日(土) 午前9時～正午 北野さんの圃場

# 里山の家 小松島の家 竣工

設計・施工・監理  
野口建築事務所



小松島市に新しい里山の家が竣工しました。

読書が趣味という建主さんの要望に応えるために、持っている本のサイズや数などを元に階段や個室に大工さんの造り付けの本棚をぴったりの寸法で設置しました。リビングは庭に向けてガラスの開口部を大きくとり、非常に開放感のある空間となっています。リビングに面した対面キッチンからも、耐火ガラスで仕切るなどして景色を十分に楽しめるようになっています。

建主さんのいちばんのお気に入りの場所はロフトで、低めの天井は座ることでちょうど良い落ち着いた空間になり、中津峰などの景色を眺めながらお茶を楽しむスペースです。

(野口 路万)





## 「木の家をつくりつづけるために」

かがわ木造塾の取り組み

有限会社小松秀行建築工房

小松 秀行



5年ほど前から、かがわ木造塾という木造建築に携わる専門家向けの勉強会を仲間と共に主催している。年間に6回程度の座学と山や職人さんの工房などに出かけて現地学ぶ2~3回のフィールドワークを行っており、座学は計画・温熱・森林・設備・構造・施工などの各分野でトップランナーとして活躍している講師の先生をお招きし半日かけて講義をして頂く。毎回、30人~40人ほどの受講生の参加がある。

この、かがわ木造塾は大阪のMOKスクールをお手本にしている。私自身もMOKスクールの受講生だったのだが、香川県で開催できれば大阪まで出かけなくて良いし、自分たちがお話しを聞きたいと思う先生をお呼びできるだろうということで始めた。また、香川県のような地方都市で日本の木造建築をリードするような先生を招いて学ぶ場をつくることは、多少なりとも自分を育ててくれた社会に恩返しができるのではという想いもあった。

5年間やってみて判ったことは、準備や打合せに結構時間を取られるので、日常業務をしながら継続して運営していくのはそれなりに大変だということだ。だが、お招きする講師の先生と講座終了後の懇親会で歓談したり、翌日に香川県内をご案内したりする中で個人的に親交を深められることは楽しみになっている。

受講生は若手からベテランで様々だが、特にこれから設計者や施工者として独り立ちしてやっていこうという若い人に受講して頂きたい思いがある。大学教育の場でも木造建築が十分に教えられてないままで学生が社会に出ているが、実務においても日常業務に追われ木造建築について俯瞰的に学ぶ機会は少なく、知識不足の若手は少なくない。



特に木構造などは、間取り優先で建て主と打合せし、構造的な知識が乏しいために構造計画の判断がつかずにスルーして、後はプレカスト会社にお任せという話もよく耳にする。設計者が独立し、設計事務所を開いて最初に手がけるのは個人住宅の設計が多いと思われるので、是非かがわ木造塾で学んで力をつけていただきたいと思っている。

ただ、年間6回程度の講座やフィールドワークを受講しただけでは、木造建築についての本当のスキルはなかなか身につかないのも事実なので、受講することで知らなかったことへの気づきやもう少し深い学びへのきっかけとしてもらいたいと思っている。

フィールドワークでは毎年一回は山に行き森林を見て、林業家や製材所の方の話を聞き、意見を交換するようにしている。実際に現地に行くことで経験し判ることが多いと度々感じている。

しかしながら、私達がかがわ木造塾で学び、求めているような木の良さを活かした木造住宅は新築住宅の中では極めて少数で、住宅メーカーが早く大量に生産する商品化された住宅が主流となっている。今日も分譲住宅団地では建築設計レベルとしては凡庸な住宅が次々と建っている。自分が住んでいる町中を探しても木の良さを活かした良質な住宅は容易に見つけることはできない。

実際に業務として、そのような大量生産型の住宅建築にたずさわっている設計者や施工者も、自分たちがつくっている住宅が本当に納得できる良いものだとは信じてないかもしれないが、そうかといってそれから離れることは経営的には難しいだろう。

新建材に頼らない伝統的な建築技術や材料、職人を含めた丁寧な生産体制は技術的なハードルも高く、大量生産に不向きのため量的に縮小し、風前の灯火で絶滅危惧種などと揶揄されている。そういった建築手法を次世代に伝えていくのは容易ではないが、かがわ木造塾の講座がその一助になればと思っている。

また、受講者である設計者や施工者同士がかがわ木造塾を通じて連携し協力関係を構築できれば状況の改善に少しでもつながるのではと思っている。

木の良さを活かした良質な木造住宅を学びこれからもつくりつづけていくためにも、かがわ木造塾の運営はもう少し続けていきたいと思っているので今後とも応援の程お願いいたします。

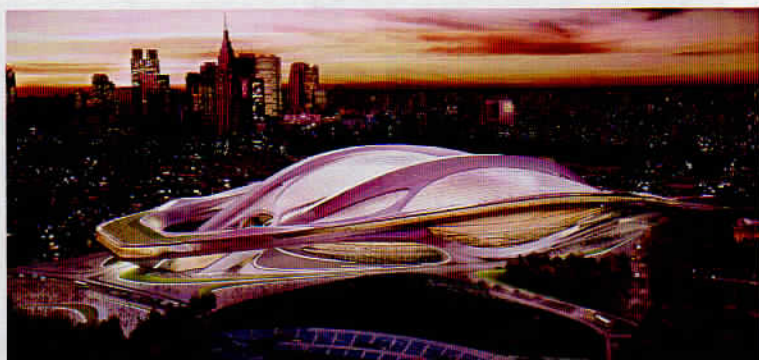


## オリンピックってそんなに大事なの？

— 新国立競技場の改築計画に思う

里山の風景をつくる会 理事  
建築家 野口 政司

新国立競技場の改築計画が迷走しています。奇抜なデザインで知られ、工事の難しさからアンビルドの女王とも云われるザハ・ハディドさんのコンペ案が選ばれたのが2012年11月。そのあまりの巨大さにコンペ直後から建築家の槇文彦氏らを中心に、市民も加わった反対運動が起こります。



それに対して国は、国際公約であり、今から計画を見直しては工期が間に合わない、という理由で突っぱねていました。しかし、計画見直しを求める世論が高まり、さらに安保法制の衆院強行採決で内閣支持率が逆転するに及んで安倍首相は計画の白紙化を発表しました。この間に2年半の歳月が無為に流れ、旧国立競技場は解体されてしまいました。改修して利用することすらできなくなってしまったのです。

私は建築を設計する者ですので、ザハ・ハディドさんのことについて少し書いておきたいと思います。以前私はザハさんの建築作品を実際に見たことがあります。スイスのバーゼル近郊にある家具製造メーカー、ヴィトラ社の建築を見学したのは20年程前です。ヴィトラ社は世界中の名品と呼ばれる家具をコレクションしていて、そのミュージアムをフランク・ゲーリー氏に設計してもらいました。又、工場はアルヴァロ・シザ氏、セミナーハウスは安藤忠雄氏、さらに私設消防署を当時まだ無名だったザハ・ハディドさんが設計しています。その小さな消防署は、他の有名な建築家の作品群の中で少しも見劣りせず、むしろ最も先鋭的なデザインで目立っていました。今回の新東京国立競技場のコンペ案は、規模の大小はあってもその時のきらめきをさらに増したものとして私には感じられます。間違いなくザハさんは自身の代表作となるであろう計画案を提示したのです。

それでは何に問題があったのでしょうか。それは、コンペのプログラム自体に大切なものが欠けていたのです。「明治神宮外苑という日本で最初に風致地区に指定された場所の歴史性と自然環境に十分に配慮すること」という一文が応募要項には欠けていたのです。神宮外苑は第1種風致地区で建ぺい率20%、高さ制限10mです。この事を考慮すれば高さ75mの応募案が出てくることはなかったでしょう。

今回の迷走を見るにつけ思い出すのは、徳島でも20年前に起こった吉野川の第十堰改築計画のことです。吉野川の景観への配慮や、莫大な建設費（1000億円）と維持費への懸念等、新国立競技場と同様のことを私たちは国や県に訴え、聞き届けられずに住民投票にまで突き進んだのです。2000年1月23日に徳島市で住民投票が行われ、結果は投票率が55%、そのうち90%の人が可動堰建設に反対の意思表示をしたのです。

さて、東京オリンピックのことです。本当にオリンピックがこの時期の日本に必要なのでしょうか。東日本大震災とその後起こった福島第1原発のメルトダウン事故。それに苦しむ人たちはいまだに立ち直ることも難しく、復興もまだまだこれからです。建材と職人の費用の高騰を招くオリンピックなどやっている場合ではないのでは、と心から思います。

「他のどんな競技場とも似ていない真新しいスタジアムから確かな財源措置に至るまで、その確実な実行が確証されています」2年前に行われたプエノスアイレスでの安倍首相のオリンピック招致演説が虚ろに響きます。

## 活動報告

1月 1日 (木)	会報42号 発行
1月 5日 (月)	里山の風だより1月 発行
1月15日 (木)	2014年度第7回理事会
1月28日 (水)	里山15年展実行委員会
2月 9日 (月)	里山の風だより高知版2号 発行
2月18日 (水)	生物多様性とくしま会議にて 田んぼ探検隊報告
2月19日 (木)	2014年度第8回理事会
2月21・22日	完成見学会 高知市 主催：里山の風景をつくる会高知
2月23日 (月)	里山の風だより2月 発行
2月26日 (木)	里山15年展実行委員会
3月 1日 (日)	里山の家構造見学会 阿南市
3月12日 (木)	里山15年展実行委員会
3月13日 (金)	香美森林組合繁藤土場見学 主催：良材ネット
3月19日 (木)	2014年度第9回理事会
4月 2日 (木)	里山15年展実行委員会
4月 9日 (木)	2014年度第10回理事会
4月13日 (月)	里山の風だより4月 発行
4月16日 (木)	里山15年展実行委員会
5月 2日 (土)	田んぼ探検隊「田植えをしよう」
5月11日 (月)	里山の風だより5月 発行
5月15日 (金)	里山の風景をつくる会15年展「まちに森をつくる」
～17日 (日)	徳島県立近代美術館ギャラリー
5月20日 (水)	2014年度第11回理事会
5月30日 (土)	田んぼ探検隊「赤腹イモリの生きもの探検」
6月 8日 (月)	里山の風だより6月 発行
6月10日 (水)	2014年度第12回理事会
6月22日 (月)	里山の風だより 高知版3号 発行
6月27日 (土)	里山の風景をつくる会2015年度定期総会
7月 4日 (土)	田んぼ探検隊「稲と一緒に育つ生きもの観察」
7月13日 (月)	里山の風だより7月 発行
7月16日 (木)	全労済地域貢献助成金贈呈式
7月29日 (水)	2015年度第1回理事会
8月 1日 (土)	田んぼ探検隊「魚を取ろう！」
8月 2日 (日)	勝浦川流域フィールド講座「人がつくる風景～自然の恵みを生かす暮らし方」主催 生物多様性とくしま会議
その他	自然の住まい協議会 生物多様性とくしま会議、吉野川流域市民基金運営委員会、とくしま有機農業サポートセンター理事会 吉野川ラムサールネットワーク運営会議 福祉ステーションそのせ運営推進会議 ミツバチぶんぶん会議 に出席

## 行事予定

8月29日 (土) 田んぼ探検隊「稲刈りをしよう！」

## 会費納入のお願い

2015年度会費をまだ納入されていない方は、同封の振込用紙で入金していただきますよう、よろしくお願ひいたします。

## 入会のご案内

入会された方には会報をお送りします。イベントなどの情報も随時お知らせします。

- ・正会員 会の運営に参加して下さる方
- ・賛助会員 会の運営に賛同し会費により応援して下さる方
- ・年会費 (個人) 1口 3,000円 (団体・法人) 1口 10,000円



トマト



胡瓜



夏本番です。

夏野菜の花を見られたことがありますか？

かくいう私も大阪で仕事をしていたころは、野菜の花とは無縁でした。実家で、少しばかりの野菜を植えるようになって、野菜の花の可憐さ、美しさに魅入られるようになりました。

春になると毎年のようにトマト、胡瓜、南瓜、西瓜を植え付けます。枝葉の伸びていく様子も面白いですが、みんな黄色い花をつけます。胡瓜、南瓜、西瓜には雌花と雄花があります。そして、なんと雌花は咲く前から赤ちゃんの実をつけています。何ともかわいいです。花が咲いたら、朝早く雄花を摘んで、雌花に花粉をつけます。小さい実がごろんと地面に横たわると、うれしくなります。(虫に受粉を任せる方が多いですが)

ズッキーニは南瓜の仲間ですが、株元にいっぱいズッキーニの実を持った雌花が次から次へと咲いていきます。(これは近所の畑で撮影しました)今年、初めて苗を頂いて、オクラを植えました。花も、また上にぴんと伸びた実も素敵でしょう。思ったよりも育てやすく、成長が早いです。次から次へと収穫できました。

ちょっと、野菜の畑で足を止め、花や実を鑑賞されたいかがでしょうか。食卓に上るお料理も、おいしさを増すかもわかりませんよ。



紅葉山  
だより

石原  
禮子



西瓜



ズッキーニ



オクラ



あとがき



時は、流れる。里山の活動もいろんな人に支えられ、15年の時を重ねてきた。

悲しい別れがあり、時が止まったことも・・・

しかし、それもまた時が解決してくれた。

時は、流れる。行く先は見えなくとも、流れに身をおき、その時を待つことにしよう。

(ながた)

2015年8月10日発行

特定非営利活動法人 里山の風景をつくる会

〒770-8055 徳島市山城町東浜傍示 28-53 TEL 088-655-1616 / FAX 088-655-1632

E-Mail : [info@enjoy-satoyama.jp](mailto:info@enjoy-satoyama.jp) URL : <http://www.enjoy-satoyama.jp>